

# 外国出生者の結核の現状と 今後、大学における結核対策

座長  
演者

**森 正明** 先生

慶應義塾大学保健管理センター  
教授・所長

演者

**太田 正樹** 先生

公益財団法人結核予防会 結核研究所  
対策支援部 部長

日時

2019年**10月10日** (木) 12:10 ~ 13:00

会場

**第2会場** (札幌コンベンションセンター 1F 特別会議場)

※ ランチョンセミナーは整理券制です。

【整理券配布について】

配布場所

札幌コンベンションセンター 1F エントランスホール

配布日時

10月10日 (木) 8:30 ~ 11:00

※ 事前登録はございません。

整理券はセミナー開始5分後に無効となります。

## 外国出生結核患者の 最近の動向と今後の対策

演者

**太田 正樹** 先生公益財団法人結核予防会 結核研究所  
対策支援部 部長

本邦における結核罹患率は総じてほぼ順調に低下し、1962年の人口10万人あたり403から2018年の12.3(速報値)まで、およそ1/30になった。現在、60歳未満の結核罹患率はいずれの世代も10を切り、一方、高齢者の結核罹患率も年々低下傾向にあり、世代交代により、今後、高齢者の結核罹患率も低下してゆくと考えられる。

一方、本邦における外国人労働者の増加に伴い、若年層における結核患者に占める外国出生者の割合が増加してきている。2000年には全結核患者に占める外国出生者の割合はわずか2.4%であったものが、2017年には9.1%とおよそ4倍になった。特に20歳代では63%(2000年には12%、16年間に5倍)と、およそ5人のうち3人が外国出生者で占められるようになった。外国出生結核患者が感染源となった結核集団発生も頻繁に報告されるようになってきている。

外国出生者の結核患者が増加してきた背景には、特に高蔓延国からの出身者が増加してきたことも要因であり、これらの国々では、保健省などへ報告される結核患者数は過小評価されており、実際の結核患者数は報告数よりかなり多い可能性もある。

外国出生の結核患者が増加し、特に高蔓延国からの入国者が増加している状況を鑑みると、今後入国時に結核スクリーニングを含め、定期的な結核検診が必要になってくると考えられる。

本セミナーでは、まず本邦における結核の現状、昨今の外国出生者の結核の傾向、課題、特に学校等を舞台とした集団発生の事例を提示し、これらの課題を解決する一つの手段として、結核スクリーニングの方法について紹介する。この上で、本邦における外国出生者に対する結核スクリーニングのあり方について議論したい。

## 慶應義塾大学における 結核検診とIGRAの運用方法

演者

**森 正明** 先生慶應義塾大学保健管理センター  
教授・所長

慶應義塾大学において、インターフェロンγ遊離試験(以下、IGRA)を使用している場面は、大きく分けると接触者健康診断(以下、接触者健診)と医療従事者の健康管理である。接触者健診に関しては2004年の学内で発生した大規模集団感染において、ツベルクリン反応検査(以下、ツ反)に対するIGRAの優位性が証明され、実施するようになった。この数年、大学生については学生健診などで発見され例はあるが、IGRAが必要になった事例はなかった。大学病院では外来や入院患者から結核発生があるため、年間数件、接触者健診が実施されている。医療従事者の健康管理に関しては、雇入時健診において、IGRAの導入以前はツ反の二段階法を実施していたが、実用的でないため、2005年からIGRAを用いるようになった。雇入時健診におけるIGRA陽性者は結核患者を診療する機会の多い医療機関の勤務経験者に多く、必要に応じて潜在性結核感染症の治療を実施した。また、医療系学部(医学部、看護医療学部、薬学部)の実習前健診もツ反の二段階法からIGRAに変更した。日本人の学生が実習参加前にIGRAが陽性であることはまれで、省略可能な状況と言えるが、実習のみならず留学においても受け入れ先の診断書の項目でツ反またはIGRAを求められる場合が多いため、今日まで継続している。実習先で学生が結核患者と接触したことが後日判明する案件が時々発生するが、当方でIGRAを実施する機会が多い。さらに2007年より、感染リスクが高いと想定される部署に勤務する医療従事者の希望者を対象にハイリスク部署健診も実施している。これらの他に研究レベルであるが、近年、急増している外国人留学生の希望者を対象にIGRAを実施した。本セミナーではそれらの結果について言及する。